

「水需要管理」WG とりまとめ（案）

1 水需要の問題点

水需要に関して、現在、抱える問題を挙げると、次の通りである。

過大な水需要予測：これまでの水需要予測はつねに実態を上回る過大な予測であった。

限りなき水資源開発；過大な水需要予測をうけて、際限なく水資源の開発に努めてきた。

聖域扱いされた慣行水利権：農業用水については実態も把握されず、見直されなかった。

放置された水の浪費：「水はタダ」のごとく、水道利用者は水を浪費してきた。

配慮されなかった環境用水：「維持用水」から「正常流量」へと、環境についての配慮は進展したものの、十分とはいえない。

2 発想の転換

これらの問題を解決するには、抜本的な発想の転換が必要である。

「不合理な水需要予測」から「合理的（順応的）水需要予測」へ

これまでの水需要予測は水道事業者の需要予測量を単に積算したものに過ぎず、実態と比べて過大なものとなっている。水資源審議会は予測の適切性をチェックする機能を発揮していない。人口の増加率が鈍化あるいは負となる成熟した社会において、持続的な発展を維持するにはどれだけの水需要が見込まれるのか。地球温暖化に対してどう対処するか。

不確定要素の多いなかで、中・長期的な水需要量を正確に予測できない場合には、一定期間ごとに見直す必要がある。

水資源の「開発対応」から「需要管理」へ

河川の総流出量が有限なことから、取水量に限界があることは明らかである。したがって、いくら水資源を開発しようとしても、開発量に限界があることも当然である。現在の河川からの取水量はかなり限界に近いとの認識に立つと、水の利用そのものを管理する水需要管理社会の実現が不可欠であることは容易に理解されるはずである。

聖域なき「水利権の見直し」

上水や工業用水などの許可水利権は定期的に見直されているが、農業用水のような慣行水利権については、多くの場合、実態も把握されず、見直しがなされたことはほとんどない。限られた水資源を有効に利用するには、あらゆる水利権について定期的な見直しが必要である。

なお、農業用水については、農業用水が恵まれた水環境を保全するうえで重要な役割を担っていることを考慮すると、農地が減少したからといって単に農業用水を減らすことには慎重でなければならない。

水の「浪費」から「有効利用（節水・反復利用など）」へ

これまでは恵まれた水資源環境のなかで、我々は水を浪費することに慣れてきた面があることは否めない。河川からの取水量を増加させないためには、湯水時ばかりでなく、日常的に節水する生活習慣を一般化しなければならない。また、反復利用を進めることも重要である。

「環境用水」の導入

これまでも、河川の正常な機能を保つための「維持流量」の概念が存在した。しかし、豊かな生態系を保全するには、新たに「環境用水」の概念を導入し、河川本来の「攪乱機能」の維持に努める必要がある。

3 水需要管理の実現に向けて

河川管理者は、上水・工水・農業用水・環境用水等の水利用に関する関係者が参加した「水需要管理協議会」を設置し、水需要の調整をはかる。この協議会における協議内容は公開とする。公開の手法については別途協議する。